漢代の淮南学

――劉向と許慎――

池田秀三

一

『淮南子』はなかなかに厄介な書物である。各篇を個別に取り上げて、それぞれの中心思想を道家・儒家・法家等々と定めていくことはさほど困難ではない。また全篇を通じても、主題別に、たとえば宇宙論や処世思想における基本的傾向を抽出することは決して至難ではない。実際、このような研究はこれまでにもしばしば試みられ、多くのすぐれた成果を挙げてきている。だが、ひとたびその全体像をつかもうとするや、ことは途端に極めて難渋となる。あまりに雑駁としていて、この書物が全体として何を目指しているのか、何が言いたいのか、さっぱり要領を得ないのである。これは考えてみれば当然のことであって、成書よりわずか百年余りしか隔たらぬ、しかも碩学中の碩学たる劉向や劉歆が「雑家」としか分類できなかったものを、現代の我々がそう簡単に本質を把握できようはずはないのである。

もっとも、皆目見当もつかぬというわけでは勿論ない。その全体を貫き支える幹が老荘思想であることは、誰の目にも明らかであろう。またその編纂意図が、道家の形而上的道をもって形而下の事物を統合すること、すな

わち道と事の相即に在るとは「要略」自ら説くところであり、その意図が一応の成功をおさめていることは従来の研究において確認されている。[1] さらにまた政治思想史の上からみれば、中央集権体制に密着してその強化のための理論を整備しつつあった儒家に対抗し、地方分権の維持を一方で図りながら、道家的立場から統一体制の理論を提出しようとしたものであるとする把え方が一般的であり、[2] もはや定説となって久しい。私もまた、やや図式的という感はするものの、如上の見解に対して基本的にはまったく異論はない。今後の研究において細部はより詳密に検討されていくことであろうが、この見解の大筋の骨格が変更されることは決してあるまい、とさえ思われるほどである。

しかしそうなると、今度は劉向や劉歆[3]がなぜそれを雑家に分類したのか、という疑問がわいてくる。劉向が『淮南子』をよく読まなかったわけではない。高誘序[4]によれば、劉向は本書を「校定撰具して、これを淮南と名づけ」ているのであり、むしろ精通していたと考えられるのである。彼に諸子学全般にわたる知識が不足していたなどということも、その博識からしてさらにあり得ない。現に『漢書』芸文志・諸子略に残された彼の九流十家の概括は、非歴史的にしてかつ経学的偏向がありはするものの、基本的には各家の本質を適確に把えているのである。とりわけ道家は劉向自身の思想を形成した不可欠の要素であり、その熟悉するところであった。

とするならば、『淮南子』全体の性格として上に述べた程度のことは、劉向には十分にわかっていたはずではないか。もちろん現代の思想史学の立場と同様の視点をもち得たわけはないとしても、少なくともその全体的主調が道家思想であること、およびその究極の目標が道と事との統一に在ることぐらいは看取したに相違ない。にもかかわらず、劉向はそれを道家にではなく、雑家に分属させたのである。それは一体いかなる理由によるのであ

ろうか。

答はいくつも考えられるであろう。たとえば、目標は声高らかに宣明されていたとしても、それは実は後からこじつけたものであって、実際には相互に矛盾をかかえた雑駁なままに結局は終っていると感じ、その実情に即して雑家に分類したにすぎない、とみることも十分できよう。しかし私は、こういう見方だけでは、問題は片づかないように思う。と言うのは、もし内容雑駁の故に雑家とするなら、他にいくらでも内容雑駁のものはあるからである。『漢志』に著録された先秦諸子の書物で純粋なるものはむしろ稀である。各家の交流混淆の結果、多かれ少なかれ、ほとんどが内容雑駁となっている。その点から言えば、それら全てを雑家としたとしてもおかしくはないのである。が、『漢志』では実はそうなっていない。内容雑駁なるにもかかわらず、大半が諸子のうちのどれか一家に所属しており、雑家に入っているもののほうがかえって少ない。これは、劉向が雑駁だから雑家というような安易な分類方法をとらなかったことを示している。彼は各書の内容を詳細に分析して本質的部分と非なる部分を分ち、その抽出した本質をもって各書の分属を決定していったのである。

いま、その一例として『管子』を挙げよう。幸いこの書には劉向叙録が残存しており、彼の分類の仕方を探るには恰好のものである。叙録はまず型どおり種々のテキストを提示したのち伝記を記し、その次に管仲の思想・行動をまとめ評価して次のように云う、

管子既に相たり、区区の斉　海浜に在るを以て、貨を通じ財を積み、国を富ませ兵を彊くし、俗と好醜を同じうす。故に其の書に称して曰く、「倉廩実ちて礼節を知り、衣食足りて栄辱を知る。上の服に度あれば則ち六親固く、四維張らずんば、国乃ち滅亡す。令を下すこと猶ほ流水の源のごときなるは、令　民心に順へば

なり」と。故に論卑くして行ひ易し。俗の欲する所は、因りて之を予へ、俗の否とする所は、因りて之を去る。その政を為すや、善く禍に因りて福と為し、敗を転じて功と為す。軽重を貴び、権衡を慎しむ。……凡そ管子の書、国を富ませ民を安んずるに務め、道は約にして言は要なり。以て経義に暁合すべし。

『管子』に極めて高い評価を与えているが、一読すぐ知られるように、実は右の文はほとんどが『史記』管仲伝の引き写しであり、従ってその評価は本来司馬遷のものである。が、それをそのまま採用している以上、同時に劉向自身の評価とみなしてよいであろう。『管子』の思想は、一言もってこれを蔽えば、「富国強兵」もしくは「富国安民」であった。このスローガンは、我々の感覚からすれば、むしろ法家によりふさわしいものである。事実、『隋書』経籍志以降の目録では大体法家に列せられている。また稷下学派の輻輳した思想を伝えているという点からみれば、前述のごとく雑家とするも不可はない。だが劉向は、あえてそれを道家に分類した。すなわち『管子』の本質を道家とみたのである。逆に言えば、彼の考える道家とは『管子』のごときものなのである。『漢志』に、

道家者流は、蓋し史官より出づ。成敗・存亡・禍福・古今の道を歴記し、然る後要を秉り本を執り、清虚以て自ら守り、卑弱以て自ら持するを知る。此れ君人南面の術なり。

とあるをみれば、それは明らかであろう。道家とは、国を保ち民を治めるための統治術に他ならない。亡禍を存福に転じ、卑にして行いやすく、「道要言約」なる『管子』の「富国安民」（これは劉向自身の語）の術は、まさにその道家の本質に合致する。それ故にこそ、『管子』は道家に分類されたのである。

このように、雑家的なる書物も、その本質を見極めた上でその分類が決定されているのである。その分類は決

して杜撰なものではなく、非常に厳密な注意が払われたとみてよいであろう。とすれば、『淮南子』が雑家とされたことの意味も、改めて考えてみなければならないであろう。はじめに私は「雑家としか分類できなかったものを」と言ったが、そのような分類に困っての一時逃避的処置ではなく、雑家を立てるには立てるだけの積極的意義があったのではなかろうか。

いま見たように、『管子』は自らの定めた分類基準、すなわち各家の概括的綱領に忠実に従って道家に列入されていた。また『晏子』『荀子』『列子』など叙録の現存している書物を調べてみると、やはりその叙録の要旨と所属せる家の綱領とがピッタリ対応している。『列子』叙録のごときは、その文中に、

其の学　黄帝・老子に本づき、号して道家と曰ふ。道家なる者は、要を秉り本を執り、清虚無為なり。

と、綱領を引いてさえいる。あるいは逆に、主要な叙録をしたためてから、それをまとめて綱領を作成したのかもしれないが、いずれにしても、叙録と綱領との密接な関係は明白であろう。ところで叙録は、このあと続いて『列子』の雑駁さを批判し、「迂誕恢詭にして君子の言に非ず」、「二義乖背して一家の書に似ず」と論評している。一家の書でないなら雑家に入れてもよさそうなものだが、劉向はそうはせず、やはり道家に分類した。それは「寓言多くして荘周と相類す」るがためでもあるが、主たる理由としては、「景皇帝の時、黄老の術を貴び、この書頗る世に行はる」という史実が物語るように、結局のところ、この書の主旨が黄老の術に帰着することによる。客観的にみて『列子』が黄老思想の書かどうかは大いに議論の余地があろうが、ともかく劉向はそう考えたのである。黄老については、いわゆる『老子乙本巻前古佚書』の発見以来、多くの研究が発表されているが、資料認定の問題もあり、なお定論的把握には至らぬようである。ただし、無為清静を標榜しつつ、そこに臣民統治

の法術を取り入れた道主法従の折衷的政治術であることは、動かせぬところであろう。[5] かかる黄老の術は道家綱領にいう「人君南面の術」に極めて類似しているから、劉向が『列子』を道家に列するも、何ら異とするに足りない。ここでもまた、分類規準はしっかりと守られている。

ただし以上の所論に対しては、恐らくただちに、『列子』叙録をもって劉向の学問を云々するのは危険で独善的であるとの反論が寄せられるであろう。と言うのは、周知のごとく、『列子』は真偽未定の書であり、それにともなって劉向叙録もまたその偽をかねてより強く疑われてきたからである。しかも現在の学界では、偽作説が絶対的優位にあるように見受けられる。実を言えば、私もまた偽作説に与する者である。だがそれは、『列子』本文についてのことであって、あわせて叙録をも抹殺することにはにわかに賛成しかねる。何となれば、偽作されたと推定されている魏晋時期には『別録』がなお完存していたのであり、たとい本文が失われていたとしても、叙録だけは原本のまま目睹し得たはずだからである。『別録』がどれくらい世間に流布していたかはわからないが、諸書にかなりよく引用されていることからみて、少なくとも稀書であったとは思われない。とすれば、叙録を偽撰すれば、かえって馬脚を現しかねない。偽撰者がそんな危険を犯すであろうか。むしろ叙録だけは本物をもってきて、全体をそれらしく見せようとするのではないだろうか。もっとも、それだけで真筆と断定することは控えるべきであろう。従来より指摘されている内容上の矛盾は確かにあるし、また『別録』に『列子』が収録されていなかった可能性もなくはなく、私にも百パーセントの自信があるわけではない。が、よしんば偽作であったとしても、上述の論旨を変更する必要はないと考える。なぜなら、いま問題にしているのは内容ではなく、書式だからである。偽作者が他の叙録をまねて書いたこと、すなわち叙録の様式・書き方を理解しそれに則ってこの叙

録を著したこと、これは絶対確実と言ってよいであろうし[6]、また現にそうなってもいる。これは当然のことであって、もし形式的に破綻していたとしたら、真偽など初めから問題にもならなかったはずであろう。となれば、この叙録に見える様式、たとえば綱領の引用は劉向叙録一般における常用パターンであったとみることも、あながち牽強ではあるまい。よって、『列子』叙録は劉向真筆の可能性が大であると思われるが、たとい偽作であったとしても、かえってそれは叙録と綱領の緊密な関係を傍証するものである、と結論できる。

以上、話が少し横道にそれてしまったが、劉向の諸子の分類の仕方というものは、ほぼ明らかになったと思う。つまり、明確なる分類規準がまず定立されていて、それを念頭に置きつつ各書の本質を考察要約して叙録に述べ（『漢志』に云う、「向輒ち其の篇目を条し、其の指意を撮りて、録して之を奏す」と）、さらに今度は、その得られた要旨を分類規準と照合してその所属を決めてゆくというやり方である。もっとも、全ての書物についてかかる周到な手順がふまれたかどうか、少し心許ないところが残らぬではないが、劉向の誠実な仕事ぶりから推して、大半は大丈夫だと思われる。あるいはまた、校書の前に分類規準がすでに確立していたとは考え難いのではないか、という疑問も提出されるかもしれない。それは確かにそのとおりで、恐らくは校定を進める作業の中で次第に整備・確定されていったものであろうし、それが綱領として成文化されるのはなおかなり遅れてのことであったろう。が、規準の大体は、当初から具わっていたに違いない。おおよその規準や理念もなしに解題を作ることなど、まず無理であろうから。

さて、話を本題の『淮南子』へ戻すとしよう。『淮南子』もまた、いま述べたとおりの過程をへて雑家に分類されたのである。つまり、叙録においてその本質が考求され、その考察の結果としての要旨が雑家の綱領に符合す

るに基づいて雑家に列せられたのである。してみれば、その分類が、単に雑然としたものだからとか、あるいは他に分類しようがないからとかいった消極的理由によるものでないことは、もはや改めて再言するまでもあるまい。雑家には雑家としての本質、一家を立てるに値する意義があるのである。

では、雑家の本質・意義とは何か。その答が雑家の綱領、すなわち『漢志』諸子略・雑家叙の文である。彼処に云う、

雑家者流は、蓋し議官より出づ。儒墨を兼ね、名法を合す。国体の此れ有るを知り、王治の貫かざる無きを見る。此れ其の長ずる所なり。（師古曰く、治国の体、当に此の雑家の説有るべし。王者の治、百家の道に於て貫綜せざる無し。）

儒・墨・名・法等の諸家を合せ兼ねること、換言すれば、各家が同格に並列されていて全体を統一体系づける主導的思考のないこと、これが雑家の本質である。そしてその統一のないところにこそ、雑家の存在意義があるのである。統一がなければこそ、「百家の道を貫かざるなき」王治のあり方を示現し、またその助けとなり得るのである。様々な立場からの論議があってはじめて君主の視野は広がり、その治世は内容豊かなものとなる。そこでは、統一はかえって治の障害となる。だが、統一が一切無用というわけではむろんない。単なる意見の羅列は、「漫羨にして心を帰する所なき」無秩序でしかない。ただ、いまも言いしごとく、雑家自らが統一性を有する必要はまったくない、と言うより許されない。なぜならば、百家を統一し体系化する大綱は、最初から別に用意されているからである。その大綱とは、かの「六経の義」である。王治が六経の義の実践である限り、王治に奉仕する雑家が六経の義に支配されるのは当然である。かくて、雑家は六経の義を充実・輔翼するという役割におい

て、かつそれによって統一されることを条件として、その存在意義を承認されることとなる。つまり簡単に言ってしまえば、雑家は六経の義を豊富にするための材料を提供する、いわば経学のための百科全書としてのみ、その価値を有するのである。

以上は雑家なる項目の説明であって、『淮南子』自体についての評価ではない。肝心の叙録が亡佚してしまったいま、劉向の同書に対する直接的見解を知る術は残念ながらない。が、前にも繰り返し述べたように、綱領と叙録は相互規定的関係にあるわけだから、右の雑家への意味づけは大体そのまま『淮南子』にも当てはまるとみても大過はないであろう。つまり、劉向は『淮南子』をあくまで一種の百科全書とみなし、またその点においてのみ評価した、というのが本節の結論となる。

かつて金谷治氏は、『淮南子』が単なる百科全書ではなく、そこに同時に、道家の老荘思想による統一がなされていることを力説された[7]。この説は広く承認されており、以後の『淮南子』研究は全てその線に沿って行われてきたとするも過言ではない。私も不朽の鉄案だと思う。しかしそれは、あくまでも現代の我々による一見解にすぎない。劉向が別なる見方をしたとて、何ら怪しむに足りない。さりながら、劉向が道家の主導的地位を無視している点はやはり問題にせざるを得ない。いま無視ということばを用いたが、これはどうみても意図的無視としか思えない。これまでにも何度か述べたように、劉向の学問のレヴェル・内容からみて、各家の比重を見誤ることは考えられない。また彼は、淮南王のもとで行われていた学術にも深く通じていたようであるから、淮南学術に道家的色彩が濃厚なこともよく知っていたはずである。雑家の綱領に儒・墨・名・法を挙げるのみで道家に及んでいないのも、あるいは何か含みがあるのかもしれない[8]。もっとも、これはただ「六家要指」を襲用しただけ

のことにすぎないとも考えられるが、そのことはまたかえって劉向の秘められた意図を顕わにする。

ところで「六家要指」では、周知のように、六家の中で道家を最高のものと目しているが、その評価の理由は、

其の術たるや、陰陽の大順に因り、儒・墨の善を采り、名・法の要を撮る。時と遷移し、物に応じて変化すれば、俗を立て事を施すに、宜しからざる所なし。

というように、諸家を総合統一しているところにあった。金谷氏はまた、道家の立場からの総合統一をめざす『淮南子』の内容がこの「要指」の道家の概念とぴったり合うことをもって、「『淮南子』は、雑家の書であるよりは、むしろ道家の書とみるべきものであろう」[9]とされる。この説もまた不易の卓見であり、『淮南子』自体の評定としては正鵠を得たものと言わねばなるまい。

しかし、繰り返すようだが、劉向がそれを雑家と認定したことについては、謬見と簡単に斥けるのではなく、それはそれで別の思想史的意義を見出すべきであろう。劉向の諸子の概括ならびに分類が、その構想の基本を「六家要指」に負うていることは、いまさら言うまでもない。従ってその六家の概念も熟知していたはずであり、「要指」の立場からみれば、『淮南子』が典型的道家の書であることも当然わきまえていたに違いない。だが劉向は、あえて「要指」に従わなかった。「道」の字を「雑」の字に置き換えたのである、儒・墨・名・法兼採の骨子は残しながら。これは意図的変更ととる以外にない。

では、かかる変更を行った理由は何だったのであろうか。明快なる解答は見出し難い。が、劉向自身の学問・思想と深く関わっていることは確かである。道家の定義変更に伴う附随措置、あるいは客観的にふさわしいネーミングというに止まらず、彼はより積極的意義を雑家に与えていると思う。序列は第八位だが、目録としては純

一の家を先に列するのは当然であって、必ずしも価値の低さを示すものではない。雑家に対する高い評価は『呂氏春秋』の扱いからしても明らかであるし、何より彼自身の学問・思想がはなはだ雑家的であり、また多くの要素を雑家書から吸収しているのである。[10] 恐らく彼自身、己の学問・思想の雑家的なるを自覚し、その重要性に鑑みて、雑家なる一家を立てたのであろう。それはまた将来の儒教がそこから多くの栄養を吸収することを願ってのことだったのではなかろうか、雑なるが故に吸収はかえって容易だと。ともあれ劉向は、雑家を百科全書として貶したのではなく、逆に百科全書たることを前面に押し出し、そこに意義を賦与したのである。『淮南子』は劉向にとって、道家ではなく、百科全書として活用さるべき書物だと考えられたのである。

二

後漢は経学の「極盛時代」（皮錫瑞『経学歴史』）であった。ということは、逆から言えば、諸子学にとっての衰亡時代であったわけである。実際、後漢では、正統的地位を得た儒家のいくつかの典籍や別格的存在たる『老子』等を除いて、大半の諸子書が研究はおろか、読まれることすらなく、忘却の深淵に沈んでいったのである。ところが、かかる諸子学不振の中にあって、わが『淮南子』は忘却されるどころか、何と注釈さえ著されているのである。注釈を書いたのは許慎・馬融・高誘の三名、それに疑問符つきながら延篤・応劭まで加えれば、[11] 計五人にものぼる。[12] これは諸子の書としては極めて異例のことであり、当時の学界の本書に対する格別の重視を示すものと言わねばならない。では、『淮南子』は何故かくも注目を浴びたのであろうか。実は、この疑問こそが本稿

執筆の動機である。

『淮南子』に許慎と高誘の注があることは早くから知っていたが、そのころは特に何とも思わなかった。私が『淮南子』の特殊な地位に気づいたのは、馬融のことを少し調べてみたときのことである。が、その折には、辞賦の大家たる馬融の個人的趣味によるものと即断していた。つまり、辞賦の勉強のために『楚辞』に注した馬融が、そのついでに『楚辞』と関係の深い淮南王の書を読んでみたのだ、と考えたのである。また、老荘思想への深い傾倒からしても、彼が『淮南子』に興味を抱くことはごく自然なように思えた。

以上の解釈が誤りであるとはいまでも思っていないが、それだけでは不十分なこともまた明らかである。すなわち、そこにさらに経学ないし儒学との関連という視点をつけ加えねばならない。この経学・儒学との関連において『淮南子』を再吟味しなければならないという見方を私に与えてくれたのは、他ならぬ高誘の次の二つの序文である。その一つ、『呂氏春秋』の序に云う、

この書の尚ぶ所は、道徳を以て標的と為し、無為を以て綱紀と為し、忠義を以て品式と為し、公方を以て検格と為す。孟軻・孫卿・淮南・揚雄と相表裏するなり。是を以て著せられて（別）録（七）略に在り。誘孟子章句を正し、淮南・孝経解を作り畢く訖（をは）る。……

ここで『淮南子』は、孟子・荀子・揚雄という儒家の代表選手と並挙されている。つまり、それらと同等の価値を認められているのみならず、儒家の教義に背馳しないこともあわせて保証されている。もっとも、これは高誘の私見にすぎず、客観的にみても正しいかどうか、ひいては『呂氏春秋』の把え方が妥当か否かは検討を要するが、一方、まったくの独断偏見と斥けることも当を失していよう。当時の学界の一般的評価をかなりの程度映し

ているとみることは、許されてよいのではなかろうか。また高誘は、『孟子章句』を正し、『孝経解』を作るという一連の作業の中で、『淮南子』の解を著している。ならば、当然そこには一連の問題意識が持続していたはずである。すなわち高誘は、経学・儒学と共通ないし関連する何らかの特徴を『淮南子』に見出していたと推察されるのである。が、その特徴が何かという探索はいま姑く置いて、残るもう一つの『淮南子注』（正式には『淮南鴻烈解』）の序を先にみてみよう。

同序の末尾に、自らの学問の由来を記して云う、

誘　少きとき自り、故の侍中　同県の盧君に従ひて其の句読を受け、大義を誦挙せり。会たま兵災に遭ひ、天下棋のごとく峙して、書伝を亡失し、廃して尋脩せざること二十餘載。建安十年、司空掾に辟され、東郡濮陽の令に除せらる。時人の淮南を為むる者少なきを覩、遂に陵遅せんことを懼る。是に於て朝餔事畢るの間を以て、乃ち深く先師[13]の訓を思ひ、参ずるに経伝道家の言を以てし、其の事を比方して、之が注解を為る。悉く本文に載せ[14]、并せ音読を挙ぐ。

高誘の淮南学は、同郷の先輩盧植より授けられたものであった。盧植自身は注釈を残していないけれども、高誘注に三個所「師説」としてその説を引いているから、その『淮南子』に対する研究・造詣はかなり深いものであったと思われる。言うまでもなく、盧植は鄭玄とならぶ経学の大家である。その彼が『淮南子』に精通していたという事実は、同書の経学における重要性を明瞭に示している。盧植にも道家的要素がないとは言えないので、その道家的要素が『淮南子』から修得された可能性も大いにあり得る。だが、学問的な面からみれば、彼は徹頭徹尾、経学の人であった。従って、『淮南子』に対する関心も、第一義的には経学の一環としておこってきたに相違

ない。すなわち、自己の学問を深め充実させる上で不可欠の資料と認め、研究したのである。

かように、『淮南子』が経学において非常に重要な意義を有しているとするならば、「五経無双」の許慎がその注を著したことにも、何の不思議もなくなる。馬融についてもまた同様である。だが、そうすると、彼ら経学者たちが『淮南子』の何を評価したのか、あるいはどこに着目したのか、という疑問が新たな問題として浮上してくる。この問題は、前に挙げた高誘の一連の問題意識は何であったかという課題と重なりあうものであり、その最終的解決のためには、『淮南子』はもとより、『呂氏春秋』についても、高誘注全体を詳細に検討分析しなければならない。が、本稿にはもはやその紙幅は残されていないし、また準備もいまだなお十分には整っていない。その考察は将来の課題とし、今回は取り敢ず許慎注を概観し、一応の見通しをつけるに止めたい。

三

今本『淮南子』が高誘本と許慎本の雑揉であること、すなわち「故曰某某、因以題篇」の八字が篇題注の末尾にあり、かつ注中に音読を有する十三篇が高注本で、それらのない残り八篇（繆称・斉俗・道応・詮言・兵略・人間・泰族・要略）が許注本であることは、古くは蘇頌、近くは島田翰等、彼我の諸先学によって考証しつくされており、すでに定説、というより常識となっている。よってここでは、その論証の改めての再確認は行わず、ただちに許慎注の内容に立入ることにしよう。

なおテキストには周知のごとき種々の問題があり、本来なら新たな校定本を作成すべきだろうが、いまは便宜

上、通行の劉文典集解本（底本は荘逵吉本）を用いる。また佚文については『集解』によるほか、通覧の便のため、陶方琦『淮南許注異同詁』を参照した。

さて、許注八篇を通覧してまず感じるのは、その注釈の簡略なことである。注の附せられている個所が少ないばかりでなく、注の文章もまた大変短い。高注の詳密なるに比して、誰の目にも一目瞭然たる対照をなしている。そもそも、篇によって注の繁簡がきわだって相違することが、許・高二注混在発見の一つの大きな糸口であった。この許注の簡略さは亡佚の結果ではない。本文と同じように、注文にも少なからぬ脱誤のあることは免れえないが、本の伝承状況よりみて、基本的には今本はかなりよく当初の原貌を留めていると認めてよいであろう。「間詁」と称せられてきたことからも、[15] 許注がもともと簡略なものであったことは明らかである。「間詁」とは、あまり見なれない名称だが、文字どおり「間ま訓詁する」意味に違いあるまい。[16] つまり、万遍なく注をつけてあるのではなく、要所要所に最少必須の注を施してあるわけである。均一型ではなく、いわば重点指向の注釈である。この名称をいつ誰がつけたか明らかではないが、私は許慎自身の命名とみたい。もし然りとせば、この注釈は簡略なるが故に、かえって許慎の学問の性格をうかがう絶好の材料となる。なぜなら、その注を下した個所こそ彼の興味のあるところ、重点の置き場所のはずだからである。

では、許慎が『淮南子』に注するに際して重点としたのは、どのような部分であったろうか。私の概観したところでは、それはおおよそ次の三種にまとめられる。第一は難読字の解釈・訓詁、二は同じく難解なる文章もしくは語句の要約、三は事物の説明である。一言で言えば、要するに極めてオーソドックスな名物訓詁の注釈である。麗々しく持上げたにしては何とつまらない結論か、と思われるかもしれない。確かに、一見すれば何の変哲

もないありきたりの注に見える。何休や鄭玄の注を読むようなおもしろさはまったくない。山田勝芳氏は「小学家的注」と評しておられるが[17]、それも宜なるかなである。

しかし、訓詁小学の注であることは、許慎の学問を考求するに無益であること、さらには漢代思想研究において無用のものであることとはイコールではない。『説文』はまごうことなき訓詁小学の書である。が、同時に最高級の思想書であることは、何人も否定しないであろう。逆に、訓詁の注釈に終始したこと、すなわちあくまで小学の一環としての分を守ったところにこそ許慎の『淮南子』に対する深い共感が現れている、と言えなくはないではないか。もっとも、彼が自覚的にそうしたとまでは言い切れまい。何と言っても創始の業のことであり（いくばくかの先行業績はあったであろうが）、一通り読解し訓を与えるだけでまず精一杯であったに違いない。また当時は注釈そのものがなお草創期を脱しておらず、経書の注釈もやはりほとんどが訓詁のそれである。許慎の師たる賈逵の『左伝解詁』や『国語解詁』も、残存の佚文より推せば、典型的なる名物訓詁の注釈である。許慎は当然それらを模範としたはずであるから、その『淮南子注』が類似のものとなったこともまた当然である。ただ、単なる訓詁の注釈にすぎぬといっても、経書の注には経書に対する深い尊崇がこめられていることは言うまでもない。私は、『淮南子注』においても同様の関係を想定し得ると思うのである。すなわち、許慎にとって『淮南子』は、五経とまったく同等の価値を有するとは言えないまでも、それに準ずる一種の経典であり、よってその研究はまさしく経学に他ならなかった。

許慎の経学の集大成は、言うまでもなく『説文』である。『淮南子』の注釈が経学の一環としてなされたとすれば、その成果は当然『説文』に吸収されているはずである。事実、両者の関係は極めて緊密である。たとえば、

上述の『淮南子注』の第一類、文字の訓詁は三百五十条ばかりあるが、そのうち『説文』の説解と一致するものが六十二条、近似するものは約七十条（類義かどうか判定し難いものもあり、正確な数は出せない）にものぼる。注釈と字典という両者の性質の違いを考えれば、その相合う分量の多さは驚異的と言えよう。十三篇注の佚文についても、ほぼ同様である。この比率の高さは、どうしても『説文』が『淮南子注』の訓詁を大幅に採用したためとみる他はあるまい。また『説文』には、『淮南子』に依拠して説解を立てるものも非常に多く見えている。そのことを声を大にして力説したのが陶方琦であり、「許君説文多采用淮南説」（『漢孳室文鈔』巻二）において残る隈なきほど詳細に考証を加えているので、いま彼の言うところを聞くとしよう。

許君説文叙中に云ふ、「博く通人に采り、信にして徵有り」と。淮南は許君手注の書たれば、宜なり其の甄采の多きこと。淮南に采りて明らかに其の書を著す者有り、如へば魏字・鱣字・芸字・蜩字・畜字共て五条。淮南に采りて其の書を著さざる者有り、如へば説文名字の下「名は自ら命るなり」は乃ち繆称訓の文、威字の下「火　戌に死す」は乃ち天文訓の文、鳳字の下「羽を弱水に濯ひ、暮て風穴に宿る」は乃ち覧冥訓の文、称字の下「秋分にして禾秒定まる」は乃ち天文訓の文。又た許君自ら淮南注中の説を采る有り。凡そ史伝志注・類書引く所の許君淮南注、多く説文と同じき者有り。……説文部内字、経籍中常見するに非ず、又た諸子百家の有する所に非ずして、其の僅かに淮南にのみ見ゆる者は、淮南より采引したること疑ひ無し。卽ひ僅かに淮南にのみ見ゆるにあらざる者有るとも、許君既に手づから淮南に注すれば、其の説文の訓の諸を淮南注より出だす者、必ず甚だ少なからざらん。大抵説文の一書、淮南に詁注するの後に成りしならん。故に采引必ず多し。余　事に触れて校質し、略刺取を為せば、之を表出せざるを得ず。如へば説文玉部琬の下に

云ふ、「圭の琬有る者」と。琰の下に云ふ、「璧の上・美色を起こすなり」と。即ち説山訓「琬琰の玉」の文。璣の下に云ふ、「珠の円ならざる者」と。即ち人間訓「翡翠珠璣」の文。……

以下、何と二百二十例に及ぶ証を挙げ、しかも「以上の諸文は淮南に出づる者の大半、引くべき者甚だ衆ければ、繁列せざるなり」と結んでいるが、論はなお終らず、さらに連文の例、二篆〜四篆相連なる（『説文』の文字の順序が『淮南子』の文章と合致することをいう）例をあまた列挙している。陶氏にはやや思い入れ過剰の気味があり、あまり適切でない例も散見される。が、全体としてはまったく陶氏の説のとおりであり、『説文』がその多くを『淮南子』に負うていることは明々白々たる事実である。『淮南子』なかりせば『説文』もまたなし、と言うも決して過言ではない。

『説文』成立における『淮南子注』の重要性を認めるのは、ひとり陶氏のみに限らない。現代の許学を代表する一人である白川静氏も、両者の関連を積極的に肯定し、「説文中に淮南子・淮南説を用いるところがあり、また多く陰陽五行説を字説に用いていることからも、許注が説文の述作と深い関係をもつものである〔こと〕が推測されよう。」「許氏の五経異義と淮南子注とは、説文解字の成立の上に、緊密な関聯をもつのである[18]」と述べておられる。

『淮南子注』が『説文』の準備のためのものであることに、もはや疑いはない。その成書の年代はつまびらかではないが、理屈からいって『説文』成立以前であるはずだから、かなり若い時期の作と考えられよう。ただ『説文』の執筆も相当長期にわたるものであったろうから、白川氏のごとく、『説文』と前後するとみるも不可はない。『淮南子注』が若書きの作であることは、その内容からもうかがえる。すなわち、率直に言って、あまり出来

がよくないのである。思想的理解が全般に浅い感があるし、また誤読の個所も一二に止まらない。一例を挙げれば、詮言篇「聖人勝心、衆人勝欲」に対して許慎は、「心は欲の生ずる所なり。聖人は欲を止む、故に其の心に勝ち、百姓を以て心と為すなり。」「心これを欲するも耐く勝止するなり」とそれぞれ注している。本文は、聖人は天性の心を保持するのに対し、衆人は欲望のままに行動することをいうのであって、許注では意味がまったく反対になる。この「勝」は王念孫の指摘するように、「任」と訓ずべきである。前後の行論よりしても、本文の趣旨は明らかであって、なぜこのような注釈が出てくるのか理解に苦しむ。そもそも許慎には、道家の人間観や養性保真の思想についての基本的理解が欠如しているのではないか、との疑いさえ禁じ得ぬほどである。これはやはり学問の未成熟、若さに起因するものであろう。注が簡略であること自体、意図的なものとはいえ、一面では未熟さからくる已むを得ざる処置であったのかもしれない。いずれにしても、『淮南子注』は、葉徳炯が「蓋し其の書、許君未だ業を卒へざるの書たり。僅かに約略に其の旁に箋識するのみにして、夾注の若く然り」（「鴻烈間詁跋」）というように、習作の域を出ないものである。[19] 恐らくは自分の勉強のためのノートの類であって、公けに世に問うつもりはなかったのであろう。引用の出典や音読を一切示さないのも、他人に読ませるつもりがないとすれば、うなづけることである。また本伝に同書が記載されていないのは、その辺の事情を暗示するものかもしれない。（ただそうすると、問題となるのは許注本に題された「記上」の二字である。この二字の意味はよくわからないが、劉績の「猶ほ標題進呈のごとし」というのがまず第一に思い浮かぶ解釈であろう。[20] だが、習作にすぎぬものを献呈するとは考えられぬから、その意味にはとれない。私は、正文の傍に箋識することを「上に記す」と表現したのだろうと推測しているが、もとより臆見にすぎず、証拠があるわけではないので、いま暫くはなお存

疑のままにしておきたい。）

さて次に、『説文』を著すにあたって、許慎が何故にまず『淮南子』に取り組んだかを考察せねばならぬが、実はこの問題についても白川氏がすでに解答を出しておられる。氏はいう、「（『淮南子』は）当時において、最も網羅的、体系的であり、しかも『講論道徳、総統仁義、其旨近老子』という思想性の高い百科辞書的著述である。説文は叙に『六芸群書之詁、皆訓其意、而天地鬼神、山川草木、鳥獣虫魚、雑物奇怪、王制礼儀、世間人事、莫不畢載』というように、万象を文字学に包括し、かつそれに体系を与えようとしたものであるが、両者のうちにはある種の近似性が認められる。許慎が淮南に注したのは、その文字学の体系を構想する上からも、有益と考えたからであろう。淮南子において百科辞書的に表現されている当時の世界観を、許慎の説文解字は、文字学的方法を以てその表現を試みたともいえるのである。しかもそれは、経学の上からは、古文学派としての古文の基礎を確立する事業でもあった。[21]」

まことに周到かつ明快な説であって、私がつけ加うべきものは何もない。ただ『淮南子』の思想性を云々することについてだけは、一旦留保をつけておきたい。と言うのは、許慎は『淮南子』の思想を学ぼうとしたのではなく、その興味はまず何よりもそこに登載されている言語・事物の豊富さに向けられていたと思われるからである。さきほど述べた思想的理解の不足も、そのことによるものであろう。思想は五経だけで必要十分なのである。他の思想を導入することは異端となる。だが、言語・事物は五経のみでは収容しきれない。世界全体を経学の内に統合するためには、経書にない言語・事物をも取り込み補完することが是非とも必要である。それは五経の権威を弱めるものではなく、逆にその真理性・絶対性を強化するものである。森羅万象を包括し体系化せんとする

『説文』の骨格たる世界観は、あくまで経学のそれでなければならなかった。

かような立場に立つ許慎にとって、南方文化の宝庫たる『淮南子』は、中原ないし北方文化を中心とする五経を補足するにおいて絶好のものであったろう。「楚人謂某曰某」なる注を頻用するのも、その興味の現れであろう。地理[22]・動植物等々、『説文』中に採用されたものの多様さは、前に陶方琦が示したとおりである。これらはいわば空間的完成と言える。因みに、許注では歴史的人物名に丹念に注をつけてあるが、これは時間的完成を目指すものとみることができよう。経学世界は空間のみならず、時間においても普遍的に妥当するはずだから(『五経異義』では、歴史的事実をもって判定するものが数例ある)。

このように許慎は、『淮南子』をあくまで知識の宝庫、百科全書として扱った。百科全書は哲学書ではない。その用途は、言語・事物の資料を収集する、すなわち訓詁名物の学に資するにある。つまり百科全書として取り扱うことこそ、訓詁名物の学＝小学を為むる許慎の本領であった。而してその小学とは、彼にとって経学世界の建設作業に他ならなかった。私が許慎にとって『淮南子』研究は経学の一環であったと強調する所以はまさしくここに存する。許慎が『淮南子』を取り上げたのは、白川氏のいうように、当時最も網羅的体系的百科全書であったからに違いないが、そこで想起されるのはかの劉向の『淮南子』評価である。劉向は『淮南子』を経義の実践に資するための百科全書として評価し、その存在を承認した。許慎はその劉向の評価どおりに『淮南子』に対したのである。許慎の師は賈逵であるが、その賈逵はまた劉歆の学統を継ぐものである。従って許慎は劉歆の学統に連なるのであり、劉向の評価を忠実に守ったとしても何の不思議もない。当時、道家の学が禁圧されていたわけではないから、あるいは劉向が『淮南子』を道家に分類していたとしても、許慎はその注を作っていたかもし

れない。だがその場合には、これはまったくの想像だが、一種の後ろめたさを感じたのではないか。高誘が「其の旨、老子に近し」というように、誰の目にも『淮南子』が実は道家の書であることは明らかであったはずである。許慎もむろんわかっていたに違いない。それでいて、何のためらいもなく『淮南子』研究に邁進できたのは、やはり劉向のお墨付があったからだ、と私には思われる。許慎ばかりではない。馬融や盧植・延篤についても、事情は同様であろう。この四人は、奇しくもみな東観で校書あるいは著作に従事している。とくに許・馬二人は一緒に東観に在籍したのだが[23]、そのころ（永初中）の東観は「老子臧室、道家蓬萊山」（『後漢書』竇章伝）と称せられていた。つまり道家、とりわけ『老子』研究のメッカであったわけである。この伝統はずっと後まで続いたものと思われる。延篤と同時に東観にいたのが、『老子銘』を著したかの辺韶である。このような東観の状況からみて、彼らが道家の学に浅からぬ見識を有していたことは疑いないし、またそのことが彼らをして『淮南子』に目を向けしめた要因であることも確かであろう。しかし、彼らは、なかんづく許慎と盧植は根っからの経学者であった。また東観も、建前としてはあくまでも経学が主であり、諸子伝記はその補助たるにすぎなかった。彼らにとって『淮南子』および道家の学は、やはり経学の補完として意識されていたもの、と私は思う。後漢における淮南学の隆盛は、劉向の雑家評価の路線の延長上において、経学の一環として花開いたものであった。

四

前節で私は、許慎は『淮南子』の思想を摂取したのではないと述べたが、実は摂取したものが一つあったので

ある。それは陰陽五行思想、より広く言えば「気」の思想である。許注には陰陽五行や気をもって説く条がかなり目につく。たとえば（本文は省略）、「春には女　陽に感じて則ち思ひ、秋には士　陰を見て悲しむ」（繆称）、「其の化は陰の陽に入るに視ひ、陽の陰に入るに従ふ」（斉俗）、「夏祭には竈を先にす。周は火徳なり。鄒氏曰く、『五徳の次は勝たざる所に従ふ。故に虞は土、夏は木、殷は金、周は火』と」（同上）[補]、「精祲は気の侵入する者なり」（泰族）、「易は気を以て吉凶を定む、故に鬼なり」（同上）、「太清は元気の清める者なり」（道応）、「太一の容とは、北極の気合して一体と為るなり」（要略）、「造化の母とは元気太一の神」（同上）などである（終りの三条は太一神＝北辰を万物生成の根源たる元気とみるものであり、漢代の北辰信仰および元気論の重要資料であるが、いまは指摘するに止める）。肝心の原道や天文篇の許注が失われているのは残念の極みであるが、「人心以上は気の往来する所なり」（原道）や「虎は陰中の陽」（天文）などの佚文よりみて、同様の傾向を有していたことがうかがえる。このように陰陽五行や気によって解釈する――時にはその必然性がないと思われるにもかかわらず――ことが多いのは、許慎の陰陽五行や気に対する深い関心を顕示するものである。それも道理で、陰陽五行や気は許慎の世界観の根幹であったのである。

『説文』には陰陽五行をもって説解する条が多いばかりでなく、その構成――それはすなわち許慎の世界観に他ならない――もまた陰陽五行に基づくものであった。『淮南子』は、周知のごとく、漢代最大の気の論書である。[24] 許慎が『淮南子』に興味を抱き、それを『説文』に生かそうとしたのも当然のことであったと言えよう。白川氏はいう、「許氏が淮南に寄せた関心は、字書的知識にとどまるものではなかったようである。淮南子は思想の書であり、原道第一に道を論じて万有の根源を説き、末篇の泰族には六芸の帰を論じて王化のことをいう。……

一書の趣意とするところは、道は陰陽の気に乗じて万物を化成し、天地人文はみな五行消長の秩序に従って運旋する理を説く。それは説文が、『一、惟初太始、道立於一、造分天地、化成万物』を以てはじめ、『亥、荄也、十月微陽起、接盛陰、亥而生子、復従一起』と終始に韻語を用い、分殊よりしてまたはじめに循環する理を寄せようとしているのと同じとみてよい。……許慎は……万有を道の消長分化の過程とする淮南子の世界観によって、その字説を思想的な体系にまで近づけている。それは全著の構成のしかたの上にも、明確に認めることができる。[25]」これまた至当の論であり、全面的に賛意を表したい。

『淮南子』の「道」の概念、および気による宇宙万物生成論が道家、とりわけ『老子』に基づくものであることは、今さら説明を要しないであろう。それを自らの世界観としたということは、根本的には道家の徒となったことを意味する。前に私は、許慎の世界観はあくまで経学的世界観であったと言ったが、それと矛盾するのではないかという疑念が生じよう。が、矛盾はしないのである。なぜなら、経学的世界観は、まさしく『淮南子』のそれと揆を一にしているからである。儒家においては、董仲舒より積極的に陰陽五行説を導入し始め、劉向父子や揚雄によって整備された。元（気）の思想も董仲舒によって創始せられ、揚雄・班固・張衡らを経て何休に流れてゆく。また『易』に「太極」あり、劉歆「三統暦」に「太極元気」をいう。かかる状況の中で、許慎が『淮南子』の元気生成論[26]と陰陽五行説を積極的に取り入れ、自らの体系の強化を図ったのはむしろ当然のことと言うべきである。ましてや学問の祖たる劉向・劉歆が先蹤たるにおいてをや。それは異端的行為であるどころか、純然たる経学の事業であったのである。

しかし、道家の元気生成論をその基盤とするような経学は、もはや仁義礼楽を事とする本来の儒学からは遠く

逸脱してしまっている。経学的世界を完全なる宇宙としようとする限り、それは已むを得ないことなのであるが、道家の書をあくまで雑家として利用しつづけることには、いずれ無理がくる。高誘の注こそ、その経学としての淮南学の破綻を告げるとともに、同時に道家の儒家に対する逆転優位の始まりを告げる鐘の音であったのだが、それについては稿を改めることとしよう。

注

(1) 金谷治『老荘的世界――淮南子の思想――』(一九五九)第二部第二章、および『秦漢思想史研究』(一九六〇)第五章第三節参照。以下、簡便を期し、後者のみ挙げる。

(2) 本田済「『淮南子』の一面」(「人文研究」四―八、一九五三、また『東洋思想研究』所収)参照。

(3) 以下、便宜のため、劉向のみ記す。『漢志』の叙は、おおむね劉向の考えを示しているとみてよい。拙稿「劉向の学問と思想」(「東方学報」五〇、一九七八)参照。

(4) 倉石武四郎「淮南子の歴史」(「支那学」三―五・六、一九二三)は、高誘序の後世の偽作なるを疑うが、これは今本が『漢志』著録の「淮南内二十一篇」にあらずとする見解に由来するものであり、前提ともども従えない。現在では、その真なることはほぼ認められている。

(5) 金谷治「黄老の術について」(前掲書第二章第三節)、内山俊彦「黄老の学と黄帝・老子の書」(『中国古代思想史における自然認識』第七章二、一九八七)参照。

(6) 武内義雄「列子冤詞」(「支那学」一―四、一九二〇、全集第六巻)参照。

(7) 金谷氏前掲書四三〇頁参照。

(8) たとえば、例の『淮南沈中鴻宝苑秘』による錬金術の失敗が何らかの影響を与えていることは考えられる。

(9) 金谷氏前掲書五五四～五頁。なおこれは、武内義雄『老子と荘子』（一九三〇、全集第六巻）中の説を敷衍したものである。

(10) 前掲拙稿参照。

(11) 現在では、延篤注の存在は肯定、応劭注は否定というのが大勢である。

(12) 高誘序に「先賢通儒、述作之士、莫不援采以験経伝」とあり、淮南学を為す者の多かったことがうかがえる。

(13) 陶方琦は馬融をいうとする。馬注をみていたことはまず確かであろうが、直接にはやはり盧植を指すとみるべきであろう。なおこの序文には、戸川芳郎氏の訳注（「中国古典文学大系」6『淮南子・説苑』所収、一九七四）がある。

(14) 注釈を別行せずに、本文に併載すること。経書注でその体裁をとる本は馬融に始まるから、あるいは馬注本からすでに注を併載していたのかもしれない。音読も馬注よりの踏襲であろう。

(15) 蘇頌「校淮南子題序」（『蘇魏公集』巻六六）「惟集賢本巻末有前賢題載云、許標其首、皆曰間詁、鴻烈之下、謂之記上、」『郡斎読書志』（袁本）「許慎注標其首、皆曰間詁、次曰淮南鴻烈、自名注曰記上、」

(16) 島田翰が「間詁当是猶曰粗解其訓詁」というも、ほぼ同意。呉則虞「淮南子書録」（「文史」二、一九六三）に「許注名曰間詁、下題曰記上、間謂間隙也、記猶箋識也、言得其間而箋識之、猶王氏雑志、兪氏平議之摘句説経」というのは私の読みと同じだが、『雑志』等と同じとするのは、書物の性格からみていきすぎであろう。

(17) 「中国古代の商と賈――その意味と思想史的背景――」（「東洋史研究」四七―一、一九八八、二二頁）

(18) 『説文新義』巻一五、一九七三、四二～三頁。

(19) 馬宗霍『淮南旧注参正』の序に「題曰間詁、猶云夾注、或疑其本非成書、理或然歟」とあり、葉説を肯定している。

(20) 劉説は全体の論としては誤りだが、この個所の読み方そのものは決して不当ではない。なお『古文旧書考』参照。

(21) 前掲書四二～三頁。

(22) 地名も丹念に注されている。単に「山名」「水名」等とするものも多いが、この注記も『説文』によく用いられているもので

ある。

(23) 許沖の上表に「慎前以詔書校書東観」とあるが、厳可均『許君事蹟考』は、これを永初四年、鄧后の命によるものとする。また『後漢書』馬融伝に「(永初) 四年、拜為校書郎中、詣東観典校秘書」とある。なお白川氏前掲書二九頁参照。

(24) 『淮南子』に見える気論については、福永光司「道家の気論と『淮南子』の気」(『気の思想』第三章第一節、一九七八) に拠る。また平岡禎吉『淮南子に現われた気の研究』(一九六一) 参照。

(25) 前掲書六五〜六頁。また阿辻哲次『漢字学——『説文解字』の世界——』(一九八五) 参照。

(26) 『淮南子』には「元気」の用例はないが(『太平御覧』天部引く天文訓は「元気」に作るが、是非はにわかには定め難い)、実質的には後の元気論にほぼ近い生成論が展開されている。少なくとも、許慎が『淮南子』の道を元気と把えていたことは確かであろう。なお『説文』には、元気の語が二度用いられており、また気の用例は極めて多数である。戸川芳郎「後漢期における気論」(前掲『気の思想』第一部第四章) を参照。なおこの論文には、『説文』の用例が資料として附されている。

(補) 許注の中で書名を挙げて引用する数少ない例(他には『詩』『老子』『荘子』が一例ずつ)であり、許慎の陰陽五行に対する深い関心をうかがわせる。なお『文選』李注にも同文を引いている。